世の中へ出る子供たち

小川未明

青空文庫

一

正吉の記憶に、残っていることがあります。それは、小学校を卒業する、すこし前のことでした。ある日、日ごろから仲のいい三人は、つれあって、受け持ちの田川先生をお訪ねしたのであります。先生は、まだ独身でいられました。アパートの狭いへやに住んでいられて、三人がいくと喜んで、お茶を入れたり、お菓子を出したりして、もてなしてくださいました。

「君たちの卒業も、だんだん近づいたね。もうこれまでのように、毎日顔を合わせることができなくなる。小原くんは、入る学校がきまったかね。」と、一人の方を向いて、おっしゃいました。

「はあ、兄さんが、中学校へ入ったらいいというのですけれど。」と、小原は、下を向きました。

「君のお兄さんは、やさしい方だ。君は、もっと体をじょうぶにせんければいけんよ。」

先生は、じっと、早く両親に別れた小原の細々とした体を見ていられました。

高橋は、早く父親に別れたけれど、母親があるのでした。正吉だけは、両親がそろっていて、いちばん幸福の身の上であったのです。

外には、寒いから風が吹いていました。ときどきガラス窓をガタガタと鳴らしました。

先生は、しばらくだまっていられましたが、

「みんなは、世間に名を知られるような、えらい人になれなくともいいから、正しい人間となって、どうか幸福に暮らしてもらいたい。」といって、うつむかれたが、そのとき、目の中に涙が光ったのです。先生のお言葉は、胸にしみて、思わず知らず、三人は、いっしょに頭を下げました。

二

それは、つい、昨日のことのようなのが、もう四、五年もたちます。小学校を出てから、三人の身の上にも、変化がありました。中でも気の毒なのは、小原で、体が弱くて、中学校を退きました。正吉も、また最近母を失って、年をとった父親だけとなりましたが、工手学校を出ると、すぐ勤めています。高橋は、このほどようやく工芸学校を卒業して、田舎へいくことになったのです。

正吉と高橋は、同じ種類の学校でありましたので、平常も往来をして、自分たちの希望を物語ったり、身のまわりにあったことなどを打ち解けて、話し合ったのでした。

「僕のお母さんはね、昔の芝居が好きなんだよ。だけど歌舞伎座なんて、高いだろう。それに、いく暇もないのさ。僕と妹のために、盛り場さえめったに出られなかったのだものね。僕は、

お母さんが達者なうちに、すこしは楽をさしてあげたいと思うのだけれど、おぼつかないものだな。」と、ある日、高橋は、正吉に向かって、いいました。

「しかし、お母さんは、お達者なのだろう。」

「ああ、病気ってしたことがないよ。それも、二人の子供を自分の手で養育しなければならぬので、気が張っているんだね。」

高橋は、そう答えました。正吉は、お母さんのことを考えると、すぐ、涙が目にあふれてくるのです。

「僕も、一度お母さんを、湯治にやってあげたいと、思っているうちになくなられて、もう永久に機会がなくなってしまった。」と、正吉は、歎息をもらしました。

「しかし、君には、まだ、お父さんがあるからいい。せいぜい孝行をしてあげたまえ。」

なくなった母親を思い出している、さびしそうなお友だちの顔を見ると、高橋は、こういってなぐさめたのです。

もう、季節は、秋の末でありました。正吉は、高橋を見送るため、門から出ました。短い日ざしは、色づいた木立や、屋根の上に、黄色く照り映えていました。

「高橋くんも、こちらに勤め口があるといいんだがな。」

正吉は、ただ、近く別れるのが悲しかったのでした。こちらに、思わしい就職口がないので、高橋が、地方へいくのを知っているからです。

「雪は、深く降らないけれど、僕のいくところは、冬の寒い田舎なんだよ。大仕掛けの堤防工事なんだがね、そこへしばらくいくつもりなのだ。ただ母と妹を残していくのが、なんだか気がかりなんでね。」と、高橋は、いいました。

「そう長くは、いっていないのだろう。」

「ああ、しかし、こちらにいい口があるまでは、どの途、しかたがないのさ。」

「きっと、そのうちにはあるよ。」

「僕たち、若いうちに、いろいろ経験するのもいいかもしれない。」と、高橋は、肩をそびやかして、答えました。

「そうさ。僕も、満洲へいこうかと思ったんだ。しかしおふくろを失って、間もないので、父がさびしがると思ったので、見合わせたのさ。」と、正吉は、西の紅く夕焼けした、空をながめていいました。

三

正吉は、月給の入った翌日のこと、田舎へいく高橋のために、送別会を開くことにしました。

あるレストランで、高橋と小原と自分の三人が、夕飯を食べながら親しく話をしたのです。

そのレストランは、大きなきれいな店でありました。煖房装置もあれば、壁にはオゾン発生機を備えてあって、たくさんのテーブルには、それぞれ客が対い合っていました。南洋産の緑色の葉の長い植物が、大きな鉢に植えられて、すみの方と、中央に置いてありました。

正吉は、勤めるようになってから、こんな場所へは、先輩につれられたり、また社員たちときたことがあるけれど、小原も高橋も、きわめてまれなことだけに、話の合間に、頭を上げて、あたりを物珍しそうにながめていました。

話は、正吉と高橋の間で、いつかまたお母さんのことになったのです。ここでも、小原だけは、母の顔さえよく覚えていなかったので、二人の話を笑ってきくうちにも、どことなくさびしそうでありました。

「わがままいわなければ、よかったと思うよ。お母さんがいなくなってから、わかった。しかし、もう遅いのだ。よく無理をいったり、また頼んでおいたことを母が忘れたといって、小言をいったりしてすまなかった。」と、正吉はいっていました。

「僕も、悪いところでなければ、母と妹をつれていくんだけれどなあ。」と、高橋がいいました。これを聞いていた、小原は、

「いいなあ、君たちが、うらやましいよ。僕には、そうした思い出もない。小さいときから、母も父も、ないのだからね。」と、鼻をつまらせたのです。

「そう、もうこんな話はやめよう。」と、正吉が、いいました。

三人は、フライだのマカロニだの、いろいろ食べたり、サイダーや、コーヒーを飲んだりして、時計が九時を過ぎてから、そこを引き上げました。会計は、少女の持ってきた伝票を見て、正吉が、払ったのであります。

道順で、高橋が先に二人と別れました。

「出発の日には、送るからね。」

「会社が、忙しいなら、いいよ。」

「なに、どうか都合するさ。」

あとは、小原と正吉の二人が、星晴れのした空を、公園の方に向かって歩いていたのです。

「今夜は、ご馳走になって、すまなかった。」と、小原がいいました。

「なんでもないよ。今度の日曜に、動物園でもいってみない？」と、正吉が、いうと、

「お天気だったらね。」と、小原は、喜びました。そして、赤いネオンサインの方を見ながら、

「四月になったら、また学校へ上がるつもりだ。」と、このごろ、体がよくなったので、小原は、元気にいいました。

「学校なんか、すこしくらいおくれたっていいよ、なるたけ大事にしたまえ。」

二人は、四つ辻のところで、また別れたのです。先刻から、正吉の頭の中で、もやもやしていたものがあります。それは、レストランの計算が、ちがっているような気がしたのでした。なんだかすこし安すぎるので、正直な彼は、そのままにしておけない気がして、公園のベン

チのところでポケットから、手帳と鉛筆を取り出して計算をはじめました。頭の中では、うまくいかなかったのです。

「ああ、やはりサイダー二本がつけ落ちになっている。これは、あの少女の損になるのだろうか。」

正吉が、食べ物や飲み物を運んできた、目の星のように清らかな、白いエプロンをかけた少女の姿を思い浮かべました。彼は急いで街へひきかえしました。そして、時計を見ると、もう十時を過ぎています。

「いつのまに、こんなに早く時間がたったろう。」と、つぶやきながら、例のレストランの前へくると、もう店は閉まっていました。なにか仕事があって、一人おくれたのか、普通の娘さんのようなふうをした丸顔の少女が、横の入り口から、出たのでありました。正吉は、その少女を呼び止めた。

「すこし会計が、ちがっていたのですが。」と、いいました。

「私にはわかりませんが、なにか余計にいただいたのでしょうか。」と、少女が聞きました。

「いや、サイダー二本の、つけ落としがあったと思うのです。」

こういうと、彼女は、正直な人だと思ったらしく、軽やかに笑いました。

「こちらの手落ちなんですから、かまいませんよ。」といいました。

「受け持ちの女給さんに、損をかけまいと思ってきたのです。」

「まあ、ごしんせつに、けっして、そんなことはないんです。それに、もう、みんなしまった後ですもの。」といいました。

正吉は、そう聞くと、いくらか気持ちが楽になりました。急いで、駅に入ろうとしたときに、夜遅く、寒いのに、外に立ちながら、花を売っている少女を見ました。やはり家のために働いているのであろうが、あまり振り向いて見るものすらありません。

「そうだ、あの金で、この少女の花を買ってやろう。」

正吉は、白い百合の花と、赤いカーネーションの花を求めました。彼は、駅の階段を上りながら、

「たとい、一銭でもまちがった金は受け取ってはなりませんよ。」と、教えられた、お母さんの言葉を思い出しました。もうそのお母さんは、この世界のどこを探してもいられないが、お母さんの教えだけは、かならず守りますと、正吉は、お母さんの霊に向かって、誓ったのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　12」講談社
　1977（昭和52）年10月10日第1刷発行
　1982（昭和57）年9月10日第5刷発行
底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス
　1940（昭和15）年4月
初出：「婦人朝日」
　1939（昭和14）年1月
※表題は底本では、「世《よ》の中《なか》へ出《で》る子供《こども》たち」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年10月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

世の中へ出る子供たち

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/